

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
意欲的に生活・学習に取り組むたくましい子どもの育成 ― 子どもの実態や系統性を踏まえた指導 ― 1 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども 2 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども 3 心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子ども ※ 保護者・地域に信頼される学校		○国語科の授業研究について、支援事業も取り入れながら研修を進めることができたので、授業改善に対する意欲が高まった。 ○高学年がモデルとなりうる姿を見せることで、異年齢活動が児童自らの力で進められるようになった。児童の主体的な活動の幅が広がった。 ○児童に付ける力を明確にした取組・行事を作ることで、基盤が固まってきた。 △児童事象(生指事象・不登校など)に関して、保護者との連携の不十分さ、初期対応の遅れなどから、学校に対する不信感を大きくしてしまった。	授業づくりと学級づくりを一体的に進めることにより、学級経営の基盤を固める。3つの目ざす子ども像として、各行事や中期学校目標に絡ませ、児童・教職員・保護者への意識化を進める。 ≪知≫自分なりの考えをもつ～授業づくり ≪徳≫言葉を大切にする～学級づくり ≪体≫ねばり強く取り組む～体力づくり
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び	教育課程 学習指導 ①言葉が大切にされる教育活動により、考えることの習慣化・表現する力の育成を図る。 ②個に応じた指導・学力補習体制を整備し、基礎・基本の定着を図る。 ③主体的に学習に向かう意欲、対話する力、学習したことを活かす実践力を伸ばす。	①国語科を重点とし「言葉を知る・考える・伝える力」を高める授業研究を行う。学園2校の授業実践から積極的に学ぶ。 ②朝ドリル、放課後補習を設定し、全校体制で基礎学力の定着を図る。また、学習支援ボランティア等を有効に活用する。 ③ICTを積極的に活用しながら、課題解決に見通しを持ったり、結果を振り返ったりして、主体性・話し合う力・既習内容を活かす力を伸ばす授業づくりを推進する。	児童アンケート 「授業では、学習計画を立て、見通しをもって、粘り強く学習している」→肯定的回答 85.3% 「授業では、自分の考えを言ったり、友達の考えを聞いたりしている」→肯定的回答→91.3% 「授業の最後に自分の学習内容を振り返り、学習のめあてが達成できたかどうかを考えている」肯定的回答→77.3% ○久美浜小の授業公開・事後研から、児童が主体的に学習を進めていく授業の在り方について多くの学びを得ることができた。(校内で参観後のミニ研修を行った) ○授業や朝のドリル学習で、タブレット活用による自分に合った課題に取り組む姿が多く見られた。 ○単元構想を重視した「着地点を明確に示すことで学習意欲を高める」実践が各担任に定着しつつある。 △放課後補習の職員体制や時間確保が難しいため、ドリルタイムの工夫改善により新たな方策を探っていく必要がある。

各学園の重点等を基盤として	生徒指導	①自分や友達の長所・短所を認め合い、自己肯定感を高める。 ②友達の名前を正しく呼び、場に応じた言葉づかいによって「思いやり」の心を育成する。 ③学校生活で配慮を必要とする児童への適切な支援を行う。	①児童の良さや頑張り、弱さも受け止められる学級づくりを進め、一人一人の児童の自己肯定感、学校や学級での安心感につなげる。 ②月全校目標を設定し、児童に目的や見通しのある学校生活を送らせる。また、「考えて行動する」場面を増やす中で、目標設定を子ども達の手になねられるようにする。 ③正しい言葉、やさしい言葉かけをしたりすることで、児童相互のつながりを深める。 ④不登校児童については、ケースに応じて情報共有と対応を組織的な動きにする。児童や保護者が見通しを持ったり意欲が高まったりするような働きかけを継続する。	児童アンケート 「人の役に立つ人間になりたいと思う」肯定的回答→96.0% 「学校や社会のきまりを守っている」肯定的回答→93.3% 「人が困っている時は、進んで助けている」肯定的回答→93.3% ○児童に考えさせる指導は、全体的な方針になりつつある。 ○高学年のリーダー性を伸ばす、学年を越えたつながりを深める取組を計画的に行うことで、異年齢集団での活動が活発になった。（児童に実感としてある） △生徒指導・特別活動・学級指導がつながった指導には至らず、自発性を高めるよりも制止性の強い指導になりがちである。 ○△不登校への指導支援は、丁寧な連携と組織的対応が定着し、一定の成果を上げている。保護者との信頼関係は強まっている。一方で、一進一退の状況も見られる。
	健康（体育）・安全	①年間を通じた家庭学習の充実、生活習慣改善の指導・支援を家庭と連携して推進する。 ②朝マラソンや朝縄跳びなどを継続して行い、体力づくりを進める	①学園共通の家庭学習ががんばり週間等の取組を活用し、家庭学習の習慣化、生活リズムの安定を図る。 ②学校生活における安心・安全への意識を高め、主体的に取り組もうとする意識を育てる。また、集団生活のマナーとして必要なことを指導する。	○体育部からの提案に基づき、体力づくりの取組（朝マラソン・朝縄跳び）に目標をもって参加する児童の姿が見られた。 ○「家庭学習ががんばり週間」は、ねらいや具体的な取り組み方を学級で指導することで、意欲を高めることにつながっている。
	(A) 危機管理	①日常的な情報共有を徹底し、早期発見・早期対応を徹底する。	①管理職が積極的に情報発信することで、報告・連絡・相談・確認を教職員に徹底する。気づいたことが情報共有できるシステムを根付かせる。指導の視点に安心安全を確保する意識を高める	○土砂災害による通学路変更、熊対策、酷暑対応、破損修理など、三者＋養護教諭＋事務＋用務員の連携と迅速な対応により、問題化させることなく改善することができた。 △老朽化に伴う施設整備は軽重を付け年次計画を立てて進めていく。
	(B) 情報活用能力（ICT活用）	①タブレット活用について、アイデアやスキルを共有し、「みな同じように使える」を目指す。	①授業における具体的な活用について、ミニ研修等を行い、広める。 ②職員間の連絡ツールに位置付け、日常的に必需品として使い慣れていく。	○自主研修「アクティブタイム」を実施することができた。強制ではない自発的な学びの場として引き続き条件を揃えていく。 ○会議のペーパーレス化、日常連絡のタブレット利用など、教職員が日常使いする環境へと進んだ。
	次年度に向けた改善の方向性	2学期終盤よりスタートさせた「業務改善・授業改善プロジェクト」は、校内研修でも取り組んできて教職員周知のプロジェクトになっている。引き続き、次年度の学校経営（運営）方針の中に位置付けていく。今年度の課題から導き出すべきキーワードは3つある。①「児童目標設定システムの構築」：児童の声を吸い上げ、目標と活動を決め、全員で振り返り次へとつないでいくシステムを考え、定着を図る。②「心を開く特別活動の研究」：単発になりがちな異年齢活動を計画的に配置すること。その土台となる「伝える・受け取る・思いやり」を体験学習によって醸成していく。③「地域体験活動の充実」：3地区の地域コミュニティの活動は非常に盛んである。その力をお借りすること、発信していく場にしていくことを丹後学等と絡めながら進めていく。		